

世界遺産登録による経済波及効果の分析

= 「四国八十八ヶ所」を事例として =



研究員 服藤 圭二

目次

1. はじめに
2. 四国八十八ヶ所について
3. 世界遺産とは
4. 観光立国行動計画（ビジットジャパン計画）
5. 世界遺産登録先の観光客数推移
6. 愛媛県の観光動向
7. 世界遺産登録による経済波及効果
8. おわりに

資料：四国のイメージ、観光に関する意識調査結果（参考：四経連 HP）

1. はじめに

日本が世界遺産条約を批准し、法隆寺や姫路城が「第一号登録」となってから12年が経過した。2003年7月現在、世界遺産に登録されている物件は754件あり、その内、日本では、11件登録されている。

現在、四国には登録物件はないものの四国四県にある「四国八十八ヶ所霊場」を世界遺産に登録する運動が行われている。(『えひめ地域づくり研究会議』から生まれた《「四国へんろ道文化」世界遺産の会》が運動している)

「四国八十八ヶ所」が、世界遺産に登録されれば世界的に知名度が向上し四国の新たな観光スポットになることは間違いなく、大幅な観光客の増加が期待出来る。また、対岸の尾道市では、今年4月に「世界遺産の登録を究極の目標」に世界遺産推進課が新設され、運動が展開されている。

観光客の増加策としては、①国策として、ビジットジャパンキャンペーンが打ち出されて、海外から観光客の獲得を2010年までに500万人から倍増させる計画が実行されている。愛媛県としては、②平成16年7月に松山～上海定期便が運航されることが決定している。

観光客が四国に滞在してもらうためには、世界的に地名度のある観光資源を開発する必要がある。

この研究では、日本における世界遺産に登録された物件を成功事例として、登録されたことにより地域に観光面でどのような経済効果等をもたらすかを調査致したい。

2. 四国八十八ヶ所霊場について

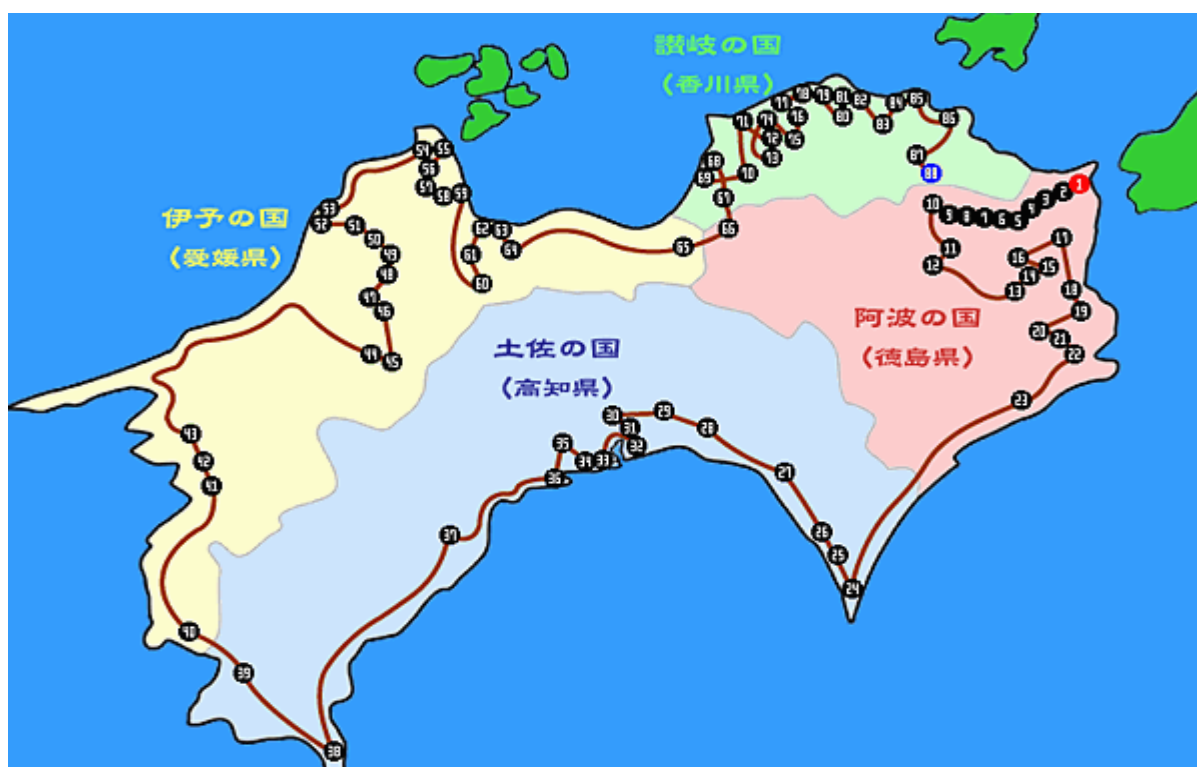
(1) 四国八十八ヶ所霊場の起源

「四国八十八ヶ所」は、弘法大師空海が、自信の修練と人々の災難を除くために開いた霊場であり、弘法大師が 42 歳の頃の事跡が多いことから弘仁 6 年（815 年）に開創されたと伝えられている。

「四国遍路」とは、その八十八ヶ所霊場を巡る旅で、起源は伊予の国の荏原村の長衛門三郎が自身の非を悟り、弘法大師の後を追って四国を巡ったのが始まりと言われている説と、弘法大師の入定後、高弟の真済が弘法大師の足跡を遍歴したと言われている説がある。いずれにしても弘法大師が入定後、弘法大師に対する信仰が起こり、平安末期から今日まで約 1200 年に渡り、弘法大師ゆかりの地を巡礼する歴史を積み重ねてきている。

四国霊場八十八ヶ所霊場は、阿波の国（徳島県）「発心の道場（1 番から 23 番）」、土佐の国（高知県）「修行の道場（24 番から 39 番）」、伊予の国（愛媛県）「菩提の道場（40 番から 65 番）」、讃岐の国（香川県）「涅槃の道場（66 番から 88 番）」からなり、88 は人間の煩惱の数と言われ、四国霊場八十八ヶ所を巡ることにより、煩惱が消えて願いが叶うとされている。

図表 2-1 四国八十八ヶ所霊場の位置



(四国一周八十八礼所巡りの HP より)

(2) 四国八十八ヶ所霊場を世界遺産に

市民団体「えひめ地域づくり研究会」は、1998年1月に「四国遍路文化を世界文化遺産に登録する運動を始める」という決議を行い活動を開始した。

「巡礼路」という点において世界遺産を調べてみると、「サンティアゴへの道」（パリを出発点にサンティアゴ・デ・コンポステーラを最終地とする巡礼路）が世界文化遺産に登録されている。また、日本においても、「紀伊山地の霊場と参詣道」が今年世界遺産に登録された。

四国八十八ヶ所霊場においても、①世界でも珍しい広域ルートの巡礼路である。②周囲を取り巻く「文化的景観・歴史的景観」を特色としているなど共通する部分があり、世界に知られるべき価値はおおいにあると考えられる。

図表2-2 「紀伊山地の霊場と参詣道」「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路（スペイン）」「四国八十八ヶ所霊場」の比較

比較項目	「紀伊山地の霊場と参詣道」	サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路（スペイン）	四国八十八ヶ所霊場
世界遺産登録年	2004年	1993年	—
遺産種別	文化遺産	文化遺産	—
関係市町村	参詣道延べ約400km	巡礼路延べ約800km	巡礼路延べ約1,300km
関係市町村	3県29市町村	5自治州166市町村	4県48市町村
構成遺産の範囲	史跡7件、史跡・名勝1件、天然記念物4件（国宝4棟、重要文化財23棟の建造物を含む） 大峯奥駈道（玉置神社を含む）熊野参詣道<中辺路（熊野川を含む）・小辺路・大辺路・伊勢路（七里御浜、花の窟を含む）>高野山町	歴史的建造物1,800件超 巡礼路本ルート「フランスの道」	国宝4件、重要文化財18件
構成遺産の内容	修験道の拠点である「吉野・大峯」、熊野信仰の中心である「熊野三山」、	巡礼路の本ルートとなる「フランスの道」と巡礼路が通過する市町村	阿波国（発心）・土佐国（修行）・伊予国（菩提）・讃岐国（涅槃）と

	真言密教の根本道場である「高野山」の3霊場及び、これらを結ぶ「参詣道」	に点在する歴史的建造物（「サンチアゴ・デ・コンポステーラ（旧市街地）」は別途1985年に世界遺産登録されている。）	四国を一周する巡礼路
自然環境・景観	紀伊山地の3つの霊場とそれらに向かう参詣道が対象となっている。建造物等は木造であり、跡地のみが残っている個所も多い。	ピレネー山脈を2つの峠から越え、スペイン北部内陸を西に向かって巡礼路が延びている。乾燥した赤土色の大地と点在する町が主なルートとなるが、山岳地域の峠越えの個所もある。建造物等は石造りであり、発掘調査などにより当時の姿に修復が行なわれているものもある。	四国4県にある四国八十八ヶ所霊場に向かう巡礼路が対象となっている。建造物は木造であり、中には国宝の建造物も含まれる。
交通	徒歩 霊場は自動車、バスによる訪問可能	徒歩 自転車 自動車、バスにより併用可能	徒歩 自転車 自動車、バスにより併用可能
標識・サイン等	自治体により異なる	黄色の矢印、路上の帆立貝の紋章	自治体により異なる
ガイド	特になし	説明を受けるには現地ガイドが必要	特になし
見学システム	特になし	料金を払うと現地ガイドに施設のキーを渡す。または、施設専用ガイドが説明する。	特になし
構成遺産の特徴	日本の原始信仰は、山や岩、森や樹木、川や滝などを神格化する自然崇拜が一般的で、容易に人を寄せ付けない神秘的な自然環境を備えた紀伊山地は、4世紀頃から、神々が宿る特別な地域	キリスト教12使徒の1人である聖ヤコブ（スペイン語名サンティアゴ）の基が9世紀初頭、スペイン北西部サンティアゴ・デ・コンポステーラで発見され、それ以来、ローマ、エルサレムと並	今からおよそ1200年前に弘法大師空海が42歳のときに修行され、人々から災難を除くために開いた、由緒ある霊跡である。人間には88の煩惱があり、四国霊場八十八ヶ所霊場を巡ること

	<p>と考えられるようになった。また、538年百済から仏教が伝来して以降は、仏・菩薩の浄土にも擬されるようになり、山岳修行の舞台となった。その結果、紀伊山地には北部に空海が唐から導入した真言密教の霊場「高野山」と、日本固有の山岳宗教である修験道の霊場「吉野・大峯」、南東部には自然崇拜に起源する神道の霊場「熊野三山」と言うように、世界にも珍しい三種類の霊場が形成された。特に、11世紀から12世紀は、数多くの人々が心の安らぎを求めて紀伊山地の霊場を訪れるようになった。以降は社会的風習になって、日本の精神文化に大きな影響を及ぼし、特色ある文化景観を形成するに至った。また、高野、熊野、吉野の霊場に至る参詣道も今なお良好な形で遺り、それらが今なお連綿と民衆の中で息づいている点においても極めて貴重である。</p>	<p>び、このサンティアゴがヨーロッパ三大巡礼地の一つとして崇められ、キリスト教信者の心の拠り所となった。発見当時イベリア半島の大半はイスラム勢力に占領されていたため、この発見はキリスト教勢力のレコンキスタ（国土回復運動）の広がりをも促す契機ともなり、巡礼路は目覚ましい発展を遂げた。中世にはヨーロッパ各地から年間50万人もの人が徒歩や馬車でピレネー山脈を越え、聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラを目指したとされている。スペイン内には何本かの巡礼ルートがあるが、フランスの道とされる本ルートはスペイン北部内陸部を通っており、このルートの他にも巡礼のサブルートに当たるものが数本ある。これらの街道沿いには巡礼者の宿泊施設としても使われた修道院、教会、病院などが多数点在し、その時代の文化、芸術、歴史の足跡を色濃く残している。</p>	<p>によって煩悩が消え、願いが叶うといわれている。全行程約1,300キロ、阿波国（発心）・土佐国（修行）・伊予国（菩提）・讃岐国（涅槃）と四国を一周する巡拝は同行二人、つまり弘法大師と共に心身を磨き、大自然の中で生かされている自分自身を見つめ直す修行の旅である。</p>
<p>宿泊施設</p>	<p>霊場及びその周辺には宿泊施設がある。宿泊施</p>	<p>スペイン政府出資によるホテルチェーンであ</p>	<p>霊場及びその周辺には宿泊施設がある。中には</p>

	<p>設の中には温泉を有しているものもある。参詣道沿線には大きな町や宿泊施設は皆無であり、かつての王子（休憩所など）は朽ち果てているため、徒歩で参詣道を複数日かけて踏破することは困難。</p>	<p>るバラドールがスペイン全土に 86 箇所ある。本ルートの「フランス道」沿線には 8 箇所、サブルートを含む巡礼路全般では 30 箇所となっている。バラドールは中世の建物等を改装して運営されており、歴史的トリップを含めた快適な宿泊と文化財保護が両立されている。また予約なしで宿泊できる安価なホテルも数多くある。巡礼路沿いにはホテルの他に保護所が数多くあり、巡礼者は無料で宿泊出来るため、徒歩・自転車で複数日かけて踏破することができる。</p>	<p>善根宿とって無料で宿泊させてくれるところもある。</p>
<p>食事</p>	<p>精進料理・海の幸・山菜料理</p>	<p>生ハム・チーズ・いわしのオイル漬け・帆立貝・蛸・えび等海の幸・ワイン</p>	<p>精進料理・海の幸・山菜料理</p>
<p>近隣の世界遺産</p>	<p>「法隆寺の仏教建造物」 「古都奈良の文化財」 「古都京都の文化財」</p>	<p>「フランスのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」「サンティアゴ・デ・コンポステーラ（旧市街）」「アストゥリアス王国の聖堂建築」 「アルタミラ洞窟」「ブルゴスの大聖堂」</p>	<p>「原爆ドーム」 「厳島神社」</p>
<p>サブルート</p>	<p>ごく一部の世界遺産に申請された大辺路及び中辺路の残りの個所など。</p>	<p>北ルート（緑のスペイン路）、銀の道、海の道（現地ガイドによる呼び名）など多数本有り。</p>	<p>ルートは、「順打ち」「逆打ち」「通し打ち」「区切り打ち」「一国参り」など。</p>

国際交流	ほとんどが日本国内からの参詣者である。	巡礼開始当初よりヨーロッパ各国から巡礼者が訪れている。	ほとんどが日本国内からの参詣者である。
特記事項	自然崇拜に根ざした神道、中国から伝来し我が国で独自の展開を見せた仏教、その両者が結びつけた修験道の霊場へ向かう参詣道（多神教世界）	キリスト教のための巡礼路（一神教世界）。	弘法大師空海が 42 歳のときに修行され、四国八十八ヶ所霊場を巡ることによって煩惱が消え、願いが叶うといわれている。

参考：和歌山経済研究所「紀伊山地の霊場と参詣道」と類似した世界遺産の現況」

3. 世界遺産とは

(1) 世界遺産とは

世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採決された「世界遺産条約」に基づいて、「世界遺産リスト」に登録された自然や文化のことであり、世界遺産リストの作成目的は、地球にある素晴らしい自然や文化を、国や民族の区別なく、全地球人のものとして守っていくところにある。特に、消滅や崩壊の危機に瀕する自然や文化財を守り、未来に受け継ぐということが最大の目的であると言える。しかし、世界遺産は単に自然保護、文化財保護のためだけではなく、例えば世界遺産に登録されたものを知れば、その国の文化・産業・技術・歴史・自然景観やそこで生活している生き物の姿までもが見えてくる。世界遺産は、お互いの国を知り合う格好の手段にもなり得る。世界遺産の最大の特徴は、自然と文化を一つの条約の下で一緒に守っていくところであり、これまで別々のものとして捉えられてきた自然と文化が実は、密接に係わりあっているのだろうという新しい考えの下、世界遺産は生まれたものである。

(2) 世界遺産リストの登録

世界遺産条約の締結国は、自国内の物件の中から自然遺産または文化遺産の候補をあげることができる。その候補地を世界遺産リストに登録するかどうか決定する組織が、「世界遺産委員会」である。世界遺産委員会は、締結国から選ばれた 21ヶ国を代表する専門家によって構成されている。年に 1 回委員会が開催され、世界遺産リストへの登録の決定及び世界遺産基金の運営などについて話し合われる。委員会はそれぞれの遺産についての評価報告書を作成し、その活動においては、自然遺産では、「国際自然保護連盟 (ICCN)」が、文化遺産では「国際記念物遺跡会議 (ICOMOS)」「文化財の保存及び修復の研究のための国際センター (ローマセンター、ICCROM) が協力している。世界遺産リストに登録するにあたっては、どのような点で世界遺産としてふさわしいか、登録基準 (クライテリア) が設

けられており、それぞれの登録地は1つ以上の登録基準を満たしていなければならない。

図表3-1 登録基準（クライテリア）

自然遺産

1	生命進化の記録、重要な進行中の地質学的・地形形成過程あるいは重要な地形学的自然地理学的特徴を含む、地球の歴史の重要な段階を代表する顕著な見本であること
2	陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や生物群集の進化発展において、重要な進行中の生態学的生物学的・過程を代表する顕著な見本であること
3	類例を見ない自然の美しさ、または美観的にみて、優れた自然現象あるいは地域を包含すること
4	人学的・保全的視野から見て、優れて普遍的価値を持ち、絶滅のおそれのある種を含む、野生状態における生物の多様性の保全にとって特に重要な生息生育地を包含すること

文化遺産

1	独特の芸術作品、創造的秀作であること
2	長期にわたって、ある文化圏において、建築物、都市計画、景観設計の発展に大きな影響を与えたこと
3	現存する、または既に消滅してしまった文明や文化的伝統に関する独特な、あるいはまれな証拠を示していること
4	人類の歴史を物語る建物ないし建築物の集合体、景観の優れた見本であること
5	一文化を代表する伝統的集落や土地利用の一例で、特に歴史の流れによってその存在が危うくなっているもの
6	普遍的な価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術作品、あるいは文学作品と直接的に、または実質的な関連を持っているもの

(3) 自然遺産と文化遺産

「自然遺産」とは、鑑賞上、芸術上、保存上顕著な普遍的価値を有している地形や生物、景観などを含む地域のことを指し、「文化遺産」とは、普遍的な価値を有している記念工作物、建造物、遺跡のことを指す。2003年7月現在、世界遺産リストに登録された自然遺産は149、文化遺産は582、両方にあてはまる複合遺産は23である。

日本では、自然遺産として白神山地、屋久島の2ヶ所が、文化遺産としては、姫路城、法隆寺地域の仏教建造物、古都京都の文化財、古都奈良の文化財、日光の社寺、白川郷・五箇山の合掌造り集落、原爆ドーム、厳島神社、琉球王国のグスク及び関連遺産群の9ヶ所が、世界遺産に登録されている。四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録されることになると文化遺産に該当する。

図表 3-2 日本の世界遺産の登録状況 (2003年7月現在)

日本の世界遺産	
自然遺産	白神山地、屋久島
文化遺産	姫路城、法隆寺地域の仏教建造物、古都京都の文化財、古都奈良の文化財、日光の社寺、白川郷・五箇山の合掌造り集落、原爆ドーム、厳島神社、琉球王国のグスク及び関連遺産群

4. 世界遺産登録先の観光客数の推移

世界遺産登録先 (2003年7月現在) が世界遺産に登録されることによってどのように変化していったかを調査した。

(1) 世界遺産登録先の観光客数の推移

図表 4-1 世界遺産登録先の観光客数の推移

	(千人)										
	法隆寺	姫路城	白神山地	屋久島	古都京都	白川郷	原爆ドーム	厳島神社	古都奈良	日光社寺	グスク遺跡群
1989年	1,153	1,197	101	171	54,746	660	8,306	2,849	14,671	7,711	3,280
1990年	1,100	811	124	187	58,542	668	8,342	2,854	14,934	8,105	4,155
1991年	1,070	871	158	222	57,317	684	8,631	2,727	14,544	8,048	4,072
1992年	1,050	885	181	242	55,731	686	8,613	2,605	14,200	7,882	4,505
1993年	1,030	1,020	212	209	55,673	555	8,541	2,718	13,982	7,068	7,522
1994年	992	883	243	233	57,040	671	9,334	3,014	13,751	6,686	6,804
1995年	916	695	356	257	49,662	771	9,304	2,893	13,546	6,619	6,347
1996年	883	861	444	253	51,764	1,019	9,494	2,980	13,468	6,786	6,230
1997年	792	716	475	264	54,036	1,074	10,235	3,119	13,392	6,260	6,541
1998年	721	792	570	280	54,667	1,047	9,259	2,681	12,961	5,809	6,539
1999年	687	713	678	260	54,450	1,060	9,581	2,475	13,060	5,737	6,931
2000年	651	662	585	263	55,689	1,237	9,252	2,423	13,261	6,514	6,702
2001年	685	708	589	286	56,986	1,423	9,233	2,416	13,603	6,105	6,568
2002年	615	729	624	290	55,835	1,545	9,259	2,609	13,899	6,041	7,825

参考：各県・市町村にてヒアリングにて作成

白神山地の観光客数は、青森県の「赤石溪流暗門の滝」の入込数

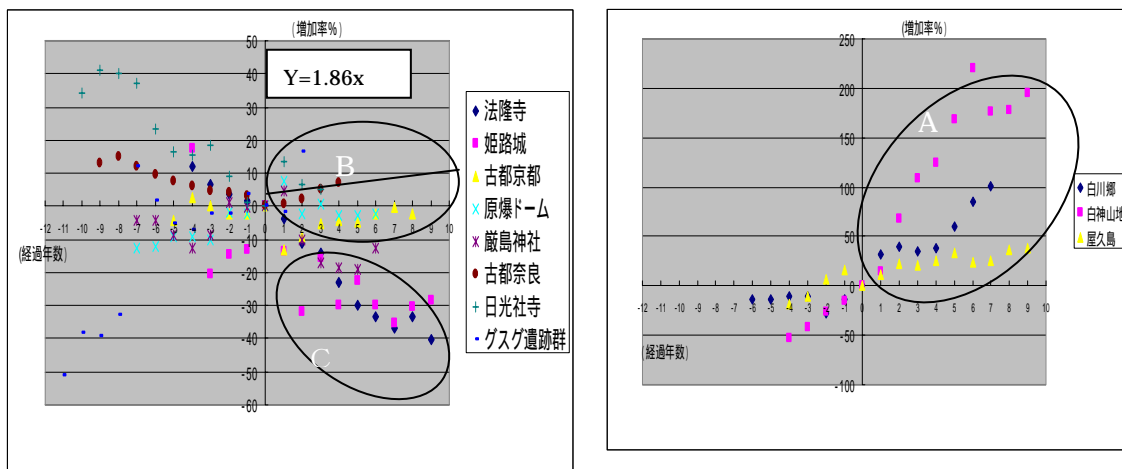
古都京都の観光客数は、京都市・宇治市・大津市の入込数を合計したもの

原爆ドームの観光客数は、広島市の入込数

古都京都の観光客数は、奈良市の入込数

■ (黄色) は世界遺産登録年度

図表 4-2 観光客の増減率の推移



(注) 世界遺産登録年を基準とし、増減率をしたもの。例：経過年数1は「世界遺産登録後1年目」経過年数-1は「世界遺産登録1年前」

○タイプ A (登録により急増したもの)

■白神山地 ■屋久島 ■白川郷 ■グスク遺跡群

世界遺産登録後も高水準で観光客が増加しているタイプ

〔特徴〕

1. 世界遺産登録されるという気運が高まり全国的な観光地として確立された。
2. 広範囲に点在している。

○タイプ B (概ね堅調推移しているもの)

■古都京都 ■原爆ドーム ■古都奈良 ■日光社寺

世界遺産に登録される気運が高まり観光客が増加し、世界遺産に登録後、概ね堅調に推移しているタイプと世界遺産に登録されるまで観光客が減少していたが、世界遺産に登録されることにより下げ止まり観光客が増加傾向にあるタイプ

〔特徴〕

1. 以前より全国的に有名な観光地である。
2. 広範囲に点在している。

○タイプ C (登録後も減少しているもの)

■法隆寺 ■姫路城 ■厳島神社

世界遺産登録される前から観光客が減少し、世界遺産登録後も減少しているタイプ

〔特徴〕

1. 以前より全国的に有名な観光地である。

(2) 四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録された場合の観光客の伸び率

四国八十八ヶ所霊場の内、愛媛県内にあるのは26霊場(40番から65番)で、世界遺産に登録されることを想定すると、

- ①四国霊場八十八ヶ所は、観光地としてではなく巡礼の場として全国的に有名であるが、国宝4件・重要文化財18件を有しており、観光客の増加も期待できる。
- ②世界遺産に登録される気運が高まると観光客の増加が期待出来る。
- ③愛媛県内に広範囲に点在している。

等の要因により、タイプB程度の観光数の増加率は期待出来る。

タイプBの中で、最も大きい増加率を示しているのは、「古都奈良」であるため、古都奈良の増加率1.86%を四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録された時の最大の伸び率とする。

※1 タイプBの世界遺産登録後の観光客増加率は、 $Y=1.86x$
(Yは増加率・Xは経過年数)

5. 愛媛県の観光動向

(1) 愛媛県の観光客数

図表5-1 愛媛県の観光客数

(単位:千人)

年別	県外観光客計	県外観光客発地別					県内観光客計	合計
		近畿	中国	九州	四国3県	その他		
1994年	6,654	1,744	1,197	822	1,381	1,510	12,784	19,438
1995年	6,478	1,413	1,245	816	1,448	1,556	13,293	19,771
1996年	6,632	1,519	1,249	833	1,507	1,524	13,765	20,397
1997年	6,523	1,531	1,204	811	1,445	1,532	14,119	20,642
1998年	6,549	1,657	1,135	833	1,370	1,554	14,498	21,047
1999年	11,173	2,781	2,933	1,041	1,752	2,666	15,296	26,469
2000年	8,836	2,236	1,793	938	1,542	2,327	14,884	23,720
2001年	8,584	1,846	1,762	949	1,540	2,487	14,873	23,457
2002年	8,517	1,980	1,762	938	1,546	2,291	15,352	23,869
2003年	8,839	1,925	1,725	970	1,680	2,539	15,353	24,192

参考：平成15年観光客数とその消費額(社)愛媛県観光協会

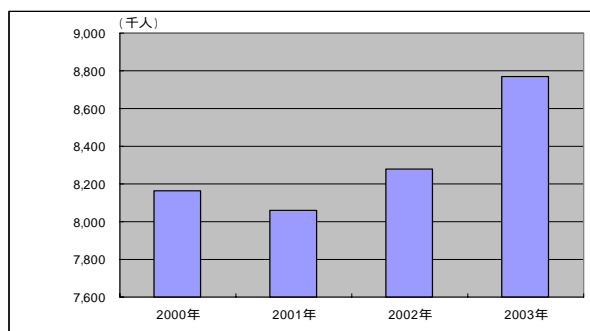
愛媛県の観光客数は、2003年24,192千人(延べ)と推計され、前年の23,869千人(延べ)に比べると、323千人(1.3%)の増加となった。

観光客の動向としては、一時期、しまなみ海道開通ブームの反動があったものの、1994年以降、交通網(高速道路等)の整備による移動時間の短縮や長引く不況による手軽な県内観光(日帰り観光)への転換により、概ね順調に推移してきている。

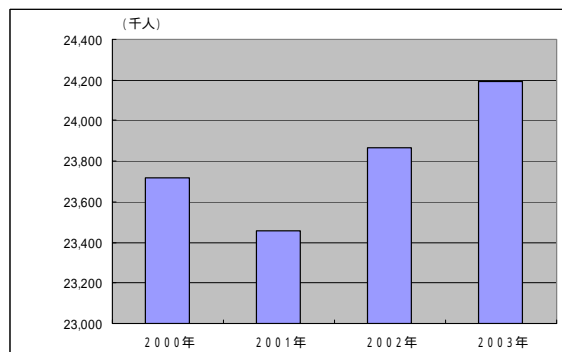
2002年及び2003年に相次いでオープンした温泉施設や道の駅など、観光客の入込みに好影響を与えるとともに、南予への高速道路の延伸効果が持続しているため、観光客数は引き続き高い水準で推移している。

図表5-2 松山地方（道後温泉郷地区）と愛媛県の観光客推移

(A) 松山地区



(B) 愛媛県

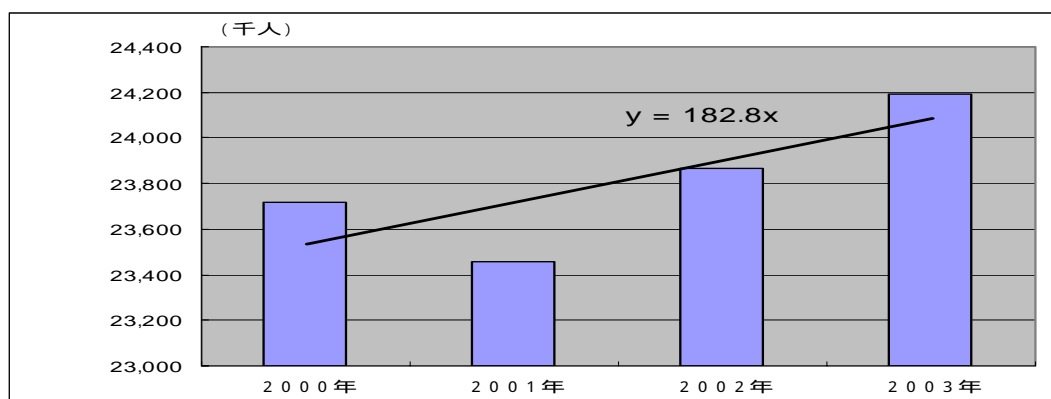


参考：平成15年観光客とその消費額（社）愛媛県観光協会

四国八十八ヶ所霊場の「お遍路さん」は年間13万人（四国八十八ヶ所霊場会事務所にヒアリング）と言われているが、観光客数は定かではない。

四国八十八ヶ所霊場が8霊場ある松山地区は図表6-2を見てもわかるように愛媛県の観光客動向と類似している。四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録されると愛媛県内の広範囲に同様の効果が得られると考えられる。

図表5-3 愛媛県の観光客の推移



（注：1999年は「しまなみ海道」開通という特殊要因から大幅に観光客が増加しているため1999年以後の観光客を参考とする）

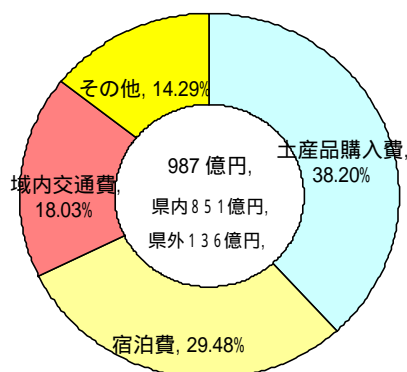
※2 愛媛県の観光客は、毎年182.8千人増加する。

(2) 愛媛県の観光消費額

2003年の愛媛県の観光消費額は図表6-4の通りであり、総額987億円と算出されている。観光消費額内訳は、土産品購入費が約377億円(38.20%)を占め、次いで宿泊費が約291億円(29.48%)、域内交通費が約178億円(18.03%)、その他141億円(14.29%)の順となっている。

※3 愛媛県における観光客1人当たりの消費額は、
 $(\text{愛媛県の観光消費額}) 987 \text{ 億円} \div (\text{愛媛県の観光客数})$
 $2,419 \text{ 千人} = (\text{観光客1人当たりの消費額}) 4,080 \text{ 円}$

図表5-4 観光消費額支出



参考：平成15年観光客数とその消費額(社)愛媛県観光協会

(3) 海外との定期航路の開設

愛媛県では1995年に松山～ソウル線の開設により、海外からの観光客が直接、愛媛県に来日できるようになった。松山～ソウル線による訪日者数は図表6-5の通りである。SARS等による特殊原因を加味すると概ね堅調推移している状況である。

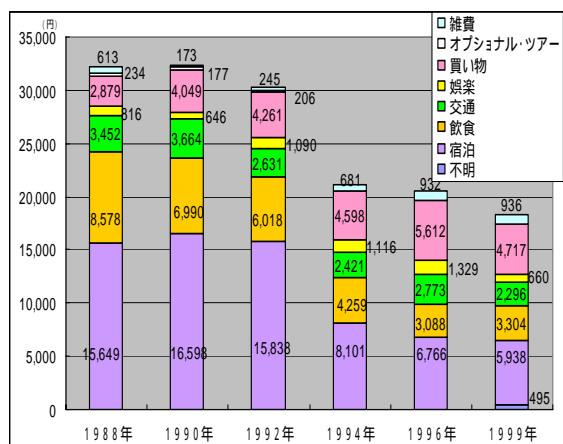
愛媛県においては、今年7月に松山～上海線が開設された。利用状況は7～8月の2ヶ月間で搭乗者数は2,231人で外国人利用率は8.8%(8月18日付愛媛新聞)である。愛媛県交通対策課の当初の試算では利用目標は、10,000人を見込んでいる。

図表6-6は来日外国人旅行者1人1日当たりの消費額を示したものでありこれによると、1990年の32,297円を上限として、年々減少傾向にある。1999年には18,346円(対1990年比△13,951円)に減少している。

図表5-5 松山～ソウル線 訪日者数

年度	松山到着		合計	外国人利用率
	日本人	外国人		
1997年	10,065	4,148	14,213	29.1
1998年	13,755	3,026	16,781	18.0
1999年	12,515	4,447	16,962	26.2
2000年	12,578	4,768	17,346	27.4
2001年	12,220	3,750	15,970	23.7
2002年	11,154	4,889	16,043	30.4
計	72,287	25,028	97,315	25.7

図表5-6 来日外国人旅行者1人1日当たりの消費額

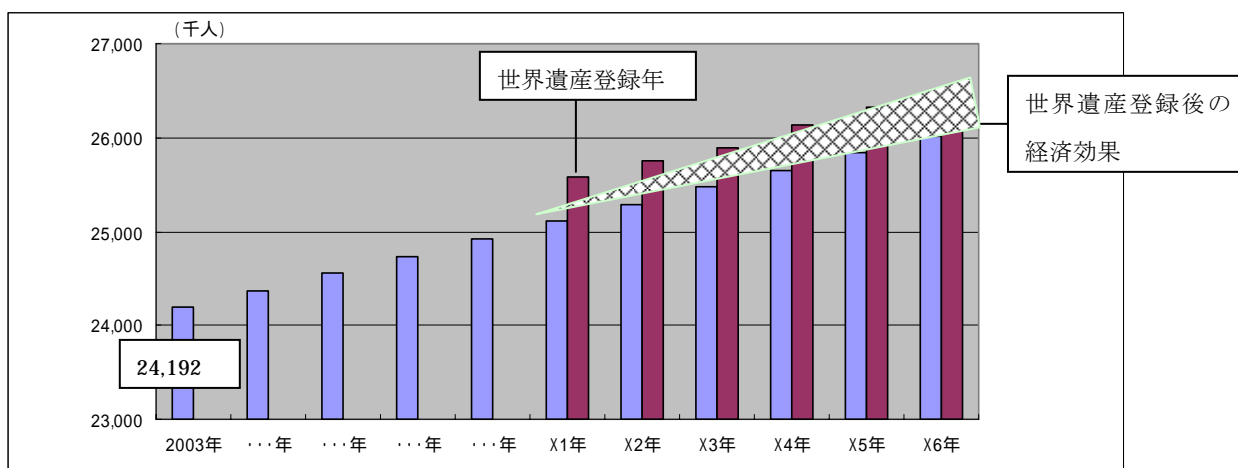


参考：1996年までは、「訪日外客消費額調査」(国際観光振興会)により作成。1999年は「訪日外国人旅行の経済波及効果に関する基礎調査報告書」(国際観光振興会)により作成。1999年以降新たな調査は行っていない。

6. 世界遺産に登録された時の経済効果

以上のような愛媛県の動向を踏まえると、「四国八十八ヶ所」が世界遺産に登録されると、下記のような経済効果が得られると考えられる。

図表6-1 今後の愛媛県の観光客増加予想と世界遺産登録による観光客数増加



(1) 世界遺産登録による観光客増加数

$$24,192 + 182.8n \leq \text{世界遺産登録後の観光客増加数(千人)} \leq (24,192 + 182.8n) (1 + 1.86\%)$$

(2) 世界遺産登録による消費額

$$(24,192 + 182.8n) \times 1.86\% \times 4,080 \quad (\text{単位: 千円})$$

- ※1 世界遺産登録による観光客増加率 1.86%
- ※2 愛媛県の年間観光客増加数 182.8千人
- ※3 愛媛県における観光客1人1日当たりの消費額 4,080円
- ※4 nは2003年以後の経過年数
- ※5 2003年の観光客数 24,192千人

7. おわりに

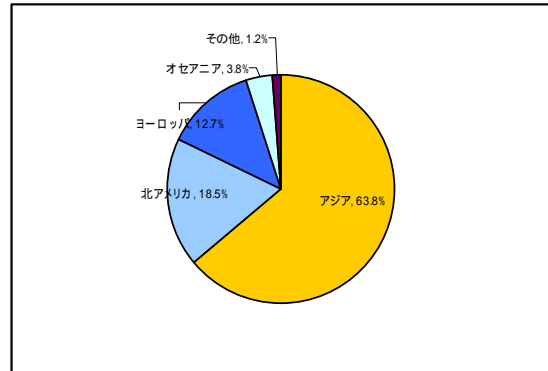
四国八十八ヶ所を世界遺産に登録する本来の目的は、「自然と文化財の保護」というところにある。しかし、結果的に日本国内もしくは世界にすばらしい遺産があるということをも PR することにより、愛媛県内の観光客の増加、観光消費額の増加が期待できる。今後、より以上の観光客を増加させるには、いかに外国人観光客を増加させることが出来るかということが課題となってくる。

日本を訪れる外国人観光客は、アジア地域からが最も多く 63.8%で次に北アメリカの 18.5%であり、国籍別・目的別訪日外国人旅行者数を見ると「歴史的名所」「郷土料理」を目的に訪日しているアジアからの観光客・欧米からの観光客は高い割合を占めている。しかし、現状では愛媛県への外国人訪問率は 0.6%で少数である。

「四国八十八ヶ所」が世界遺産に登録されれば「歴史的名所」「郷土料理」等を目的に愛媛県に来県する観光客も増加すると予想される。また、愛媛県は国際線として松山～韓国線・松山～上海線が開設されており、アジアからの観光客が直行便で訪日し、「世界遺産観光」をした後、日本国内を旅行することも考えられるし、またその逆も考えられる。

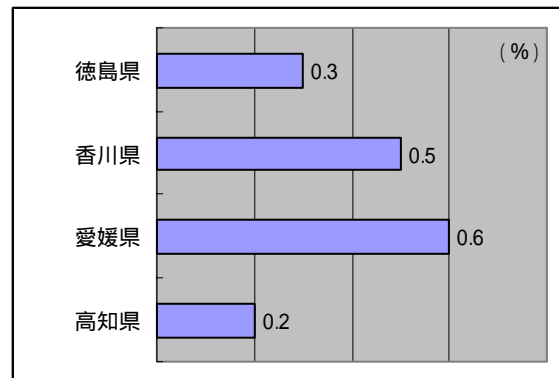
重要なのは、観光消費額が多い外国人（1人1日当たり消費額 18,346 円）を取り込むことが観光消費額の増加につながり、より大きい経済効果を得ることができる。

図表 7-1 国籍別訪日外国人旅行者数



参考：1999 年データ、2001 年版 JNTO 国際観光白書

図表 7-2 四国の外国人訪問率



参考：1999-2000 年データ、

訪日外国人旅行者調査 1999-2000

図表 7-3 国籍別・目的別訪日外国人旅行者数

	(単位: %)				
	アメリカ	イギリス	フランス	香港	中国
大都市/都市の生活	52.8	47.7	57.6	71.5	66.2
テーマパーク等	13.6	11.7	4.7	39.5	17.3
買い物/ファッション	64.3	55.5	55.3	82.5	64.9
寺社・庭園・歴史的名所	50.1	45.9	61.2	42.3	47.1
日本料理・郷土料理	85.1	82.6	80	72.2	67.1
工芸品	19.5	12.5	15.3	11.3	11.6
複数回答結果総%	508.5	452.3	476.3	499.5	463.9

参考：1999-2000 年データ、

訪日外国人旅行者調査 1999-2000

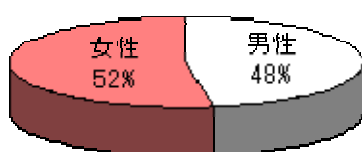
(1) 調査期間、ご回答者の状況等

調査期間:平成 14 年4月 23 日～6月 30 日。

ご回答者数:海外(3 件)を含む 3,502 件。

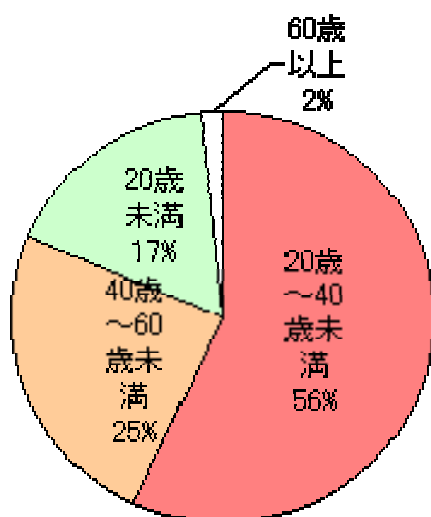
ご回答者の内訳

< 性別 >



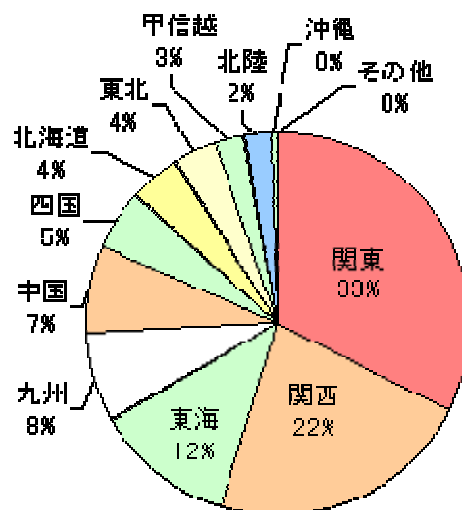
< 年代別 >

20 歳～40 歳までの方からの回答が最も多かった (56%)。インターネット上での回答のため、60 歳以上の方の割合は 2%と少なかった。



< 地域別 >

実際の人口比にほぼ沿った分布となっており、関東地域が最も多く(33%)、次いで関西(22%)、東海(12%)の順。

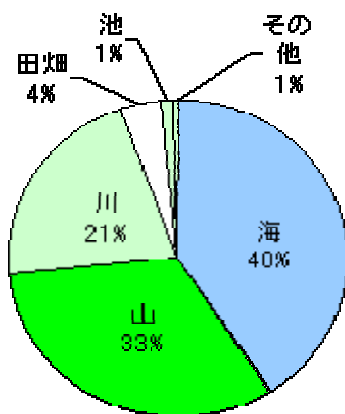


(2) 「四国」のイメージアンケート

「四国」と聞いて連想するイメージの言葉を選択してもらった結果、

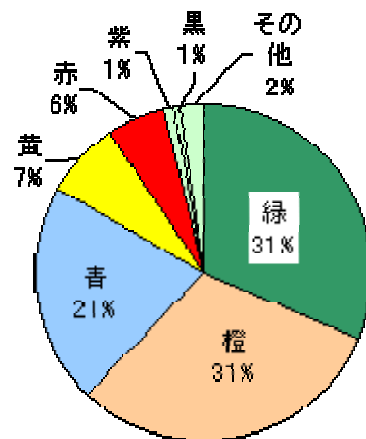
自然については？

「海」(41%)、「山」(33%)が多く、次いで「川」(21%)。四国および甲信越地域の方は、「海」が50%と多い。



色については？

四国のイメージカラーは、「緑」、「橙」がそれぞれ31%、「青」が21%。四国の方は「緑」39%、「青」34%が多いが、北海道・東北・北陸の、いわゆる寒冷地域では、暖色系の「橙」・「赤」で回答する方が40%~50%を占めており、「南国四国」のイメージが強いと思われる。

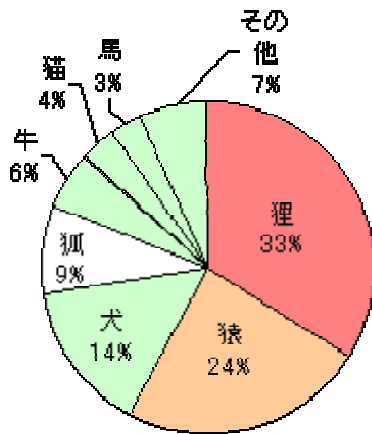


(参考)地域別で見た四国のイメージカラー

	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	東海	関西	中国	四国	九州
緑・青	40.3	36.6	49.6	55.8	33.8	53.7	56.8	54.6	73.2	54.4
橙・赤	42.4	52.0	38.6	33.7	49.4	35.8	31.3	38.3	22.3	34.0

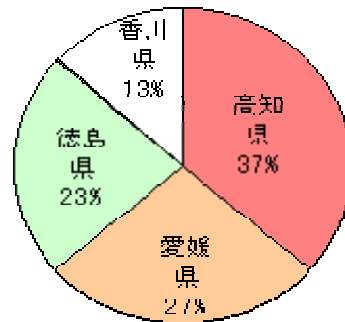
動物については？

「狸」(33%)、「猿」(24%)といった山の小動物をイメージする方が多い。四国の方は、特に「狸」(46%)が多いが、これは小松島の金長狸や屋島狸を意識したものと考えられる。



県では？

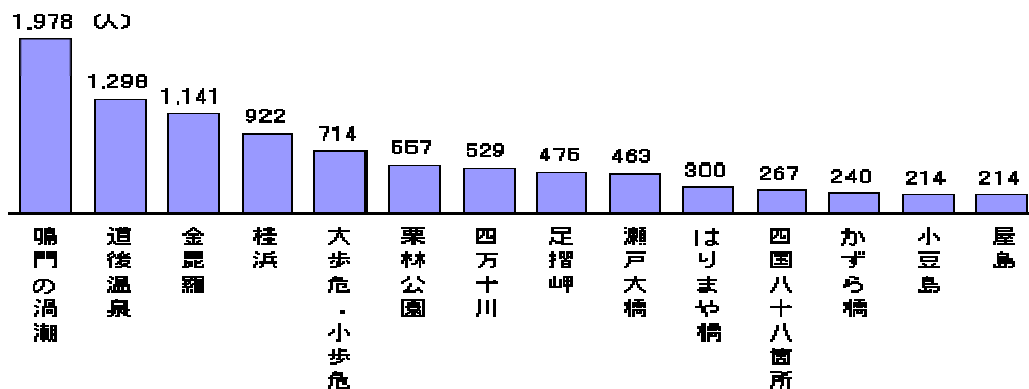
代表的に思い浮かべる県は高知県(37%)、次いで愛媛県(27%)、徳島県(23%)の順で、香川県(13%)とする回答は、最も少なかった。地域別では、中国が対岸の愛媛県を回答した方が最も多かったが、他の全ての地域において、高知県とする回答が最も多かった。



(3) 四国の「どこを」知っているか

最も多かった所は「鳴門の渦潮」で、次に「道後温泉」、「金毘羅」、「桂浜」であった。「松山」や「高知」といった地名の回答も多かった。「金毘羅」は、四国内の代表的な観光地の一つとして認識されているが、香川県のイメージとは直接結びついていないと思われる。

< 四国内で知っている主な観光地 >



(4) 四国を旅行した経験や、旅行の満足度

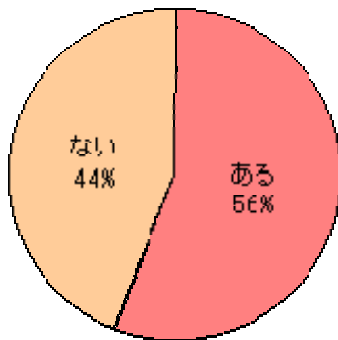
出張目的以外での四国の旅行経験

半数以上(56%)の方が、出張以外で四国を旅行したことがあった。

地域別に見ると、本四架橋開通を反映し、関西・中国地域は、多くの方(約8割)が四国を旅行した経験を持っている。同じ近隣地でも、九州地域については5割であり、東海地域とはほぼ同じ結果であった。

また、遠隔地では、北海道地域の方が、東北地域に比べて四国の旅行経験が多く見られたが、これは、四国との定期航空路線の便数の違いが影響しているのではないかと考えられる。

< 四国旅行の状況 >



(参考)地域別の四国訪問の状況 (単位: %)

	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	東海	関西	中国	九州	沖縄	計
ある	34.3	22.0	43.1	38.4	40.2	49.4	74.6	86.5	49.6	15.4	45.4
ない	65.7	78.0	56.9	61.6	59.8	50.6	25.4	13.5	50.4	84.6	54.7

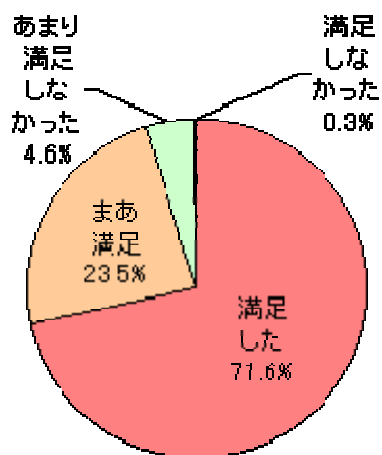
旅行の満足度

「満足」が72%、「まあ満足」が23%で、合計95%の人が満足感を示している。

「満足」、「まあ満足」別では、「満足」と回答した割合は、沖縄、北海道、東北など、遠隔地になるほど高い。これは、自然や歴史・文化の違い等が満足感につながっているものと考えられる。

なお、四国旅行に満足しない理由としては、「交通が不便」を挙げる方が最も多く、次いで「観光地が期待はずれ」・「道路が悪い」などであった。

< 四国旅行の満足度 >



(参考 1)地域別満足の数値 (単位: %)

	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	東海	関西	中国	九州	沖縄	計
満足	88.6	87.1	77.6	75.6	74.7	68.7	59.8	45.7	72.8	92.3	74.3
まあ満足	9.3	11.2	19.2	23.2	19.0	24.8	32.8	46.2	21.3	7.7	19.6

(参考 2)四国旅行に満足しない理由

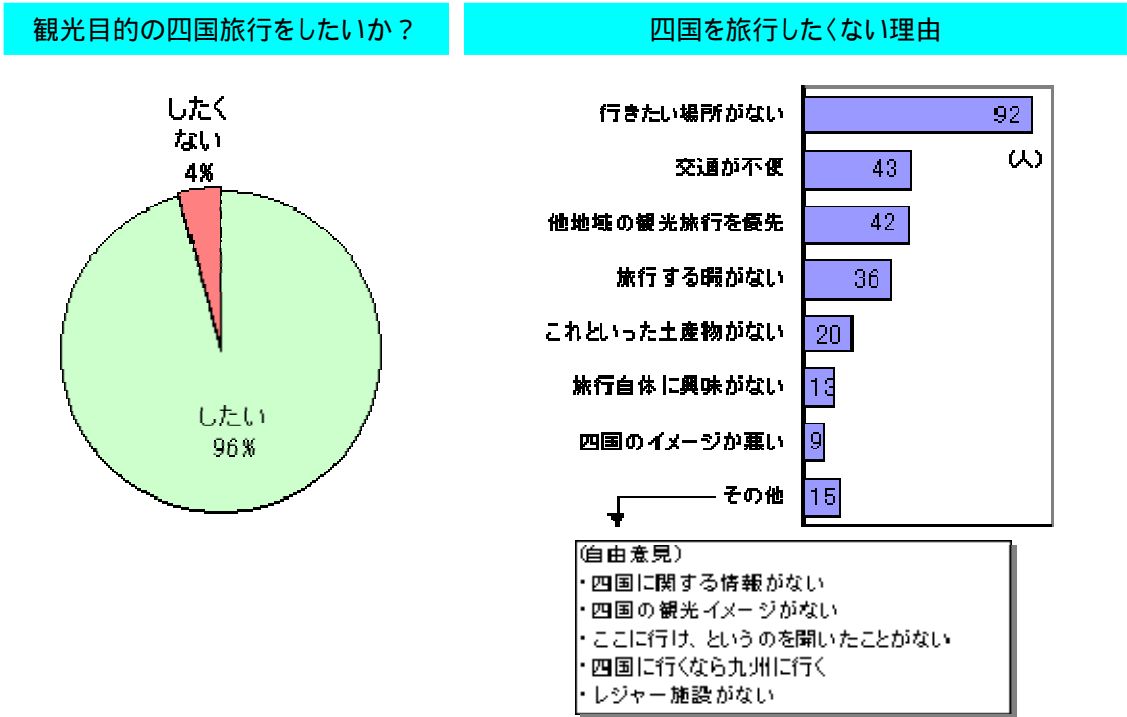
・交通が不便	・大橋の通行料や宿泊料金が高い
・観光地等が期待はずれ	・ホテル・旅館の接遇が悪い
・道路が悪い	・案内板の整備が不十分

(5) 四国の旅行経験がない方の意識

四国の旅行経験がない方(44%)の四国観光についての意識は、ほぼ全員(96%)が、機会があれば四国を旅行したいと考えている。

しかし、一部の方(4%)については、旅行したくないと考えている。この理由として、「行きたい場所がない」、「交通が不便」、「別の所に行きたい」と回答する方が多く、「交通不便」の問題は、旅行経験の有無に関わらず、観光上の障害となっている状況が伺われた。

また、自由意見として、「四国に関する情報がない」、「観光イメージがない」などに表されるPR不足や、「レジャー施設がない」、「九州に行く」などの魅力不足を指摘する声も多くあった。



参考：四経連のホームページ